

# 日语考研综合测试指导

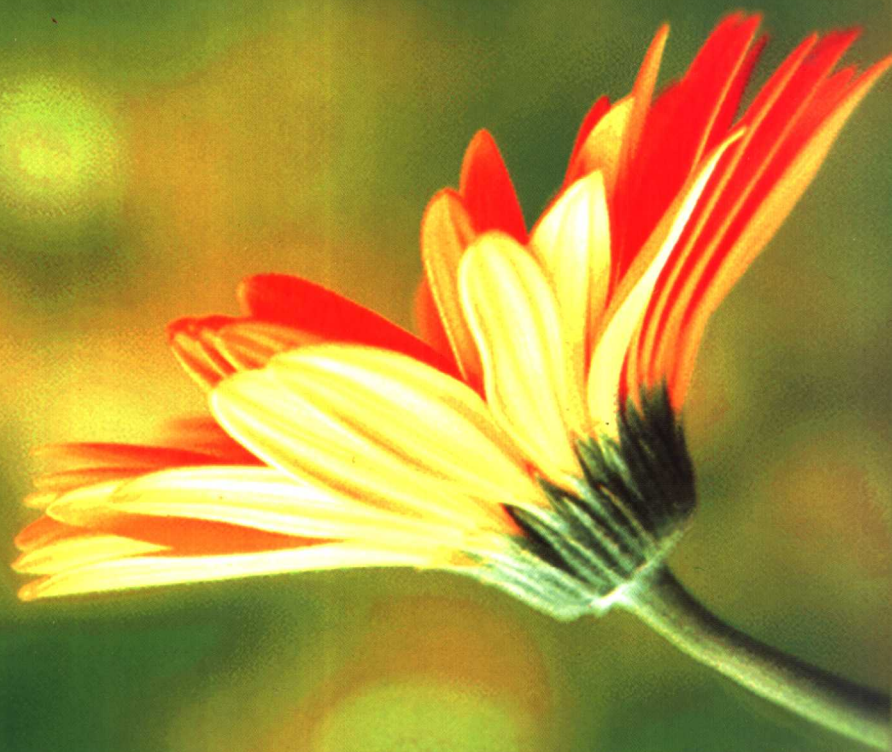
崔香兰 张晓华

主编

陈岩 横山邦治 主审

张士杰 杨安娜

文学史 • 古典文法 • 文章读解  
政治 • 经济 • 历史 • 地理 • 现代文化



大连理工大学出版社

# 日语考研综合测试指导

作者：张颖华

主编

编者：张颖华

主审

译者：张颖华

日语考研综合测试指导



清华大学出版社

# 日语考研综合测试指导

文学史●古典文法●文章读解  
政治·经济●历史·地理●现代文化

崔香兰 张晓华 主编  
张士杰 杨安娜  
陈岩 横山邦治 主审

大连理工大学出版社

© 崔香兰等 2004

图书在版编目(CIP)数据

日语考研综合测试指导 / 崔香兰等主编. — 大连: 大连理工大学出版社, 2004. 11

ISBN 7-5611-2723-5

I. 日… II. 崔… III. 日语—研究生—入学考试—自学参考资料 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 090732 号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市凌水河 邮政编码: 116024

电话: 0411-84708842 传真: 0411-84701466 邮购: 0411-84707961

E-mail: dutp@dutp.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连业发印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

---

幅面尺寸: 185mm × 260mm 印张: 19.25 字数: 442 千字  
印数: 1 ~ 6 000

2004 年 11 月第 1 版 2004 年 11 月第 1 次印刷

---

责任编辑: 王佳玉 高颖 责任校对: 萧音 任智慧  
封面设计: 苏儒光

---

定 价: 29.80 元

## 序

目前,中国呈现出令人喜悦的景色。那就是日语学习者逐年增多,日资企业也不断进入中国市场。随着中日两国在政治、经济、文化等多方面领域的友好交流日益加深和发展,社会也就更加需要具备高级日语知识的人才。因此大学日语专业毕业生当中希望继续深造者大有人在,而报考日语专业研究生的人数也逐年增多。这种现象已经成为一股潮流,一种趋势。这也将更多领域、更深层次上促进中日之间的交流和两国的发展。

众所周知,中日之间的文化交流具有悠久的历史。比如日语的文字中使用了很多汉字,这是因为日本文化在很大程度上模仿和吸收了中国文化。这一点日本和朝鲜不同。日本历经两千年不断地引进和吸收中国文化的同时,还灵活地创造出具有日本民族特色的日本文化。也许正是这一点引起了学习日语的中国学生的浓厚兴趣,他们不仅想掌握好日语会话能力,更想进一步掌握日本文化知识。日语考研人数逐年增多的现象,也许正说明了这一点。

但是在中国,想迈进研究生院的门坎绝非易事。日语考研中出现的跨度大、考察点巨细的众多难题已经证明了这一点。《日语考研综合测试指导》能帮助你解决这一难题。

此书具有以下三个特点:

1. 内容广泛。它包括日本文学史、日语古典文法、日语文章读解、日本政治·经济、日本历史、日本现代文化、日本地理等方面的内容。让你一册在手,面面俱到。
2. 综合指导。对每个部分,特别是日本文学史、日语古典文法等部分附加了归纳性的精解指导。同时也针对答题技巧、解题思路、常出题型等方面做了一定程度的解释和分析。让你解题时犹如抽刀断丝,得心应手。
3. 试题多样。试题包括简易型、疑难型、复杂型、综合型等不同题型,让你由浅入深,渐入佳境。

以上三个特点,不仅适合日语语言文学专业的考生和适合其他与日语相关专业的考生,也适合准备到日本留学考研的学子,而且通过试题练习,不仅可以让学生温习各个学科的基础知识和综合知识,也可以提高学生的应试技巧和能力。

我真诚地希望本书不仅能使考生们掌握应试的技巧,也希望它能成为更好地了解日本文化的良好教材,更希望它能在学习日语的学生当中广泛流传和普及。

文学博士:横山邦治

2004年6月25日

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| 第五章 日本史                  | 224 |
| 1 上代——解説と応用問題            | 224 |
| 2 中古——解説と応用問題            | 231 |
| 3 中世——解説と応用問題            | 238 |
| 4 近世——解説と応用問題            | 245 |
| 5 近・現代——解説と応用問題          | 252 |
| 第六章 日本現代文化               | 260 |
| 1 日本文化の形成・応用問題           | 260 |
| 2 日本人の衣食住の生活・応用問題        | 261 |
| 3 年中行事と通過儀礼・応用問題         | 262 |
| 4 日本人の伝統的な心情とものの考え方・応用問題 | 263 |
| 5 日本人の行動様式と日本文化の課題・応用問題  | 265 |
| 第七章 日本の地理                | 269 |
| 1 日本の地形の特色               | 269 |
| 2 日本の気候の特色               | 269 |
| 3 実践テスト                  | 270 |
| 4 日本の林業の現状               | 270 |
| 5 日本の水産業の現状              | 271 |
| 6 日本の資源とエネルギー            | 273 |
| 7 日本の工業                  | 274 |
| 8 確認テスト                  | 278 |
| 9 実践テスト                  | 278 |
| 10 日本の地域開発と環境問題          | 279 |
| 11 日本の貿易の特色              | 281 |
| 12 日本の人口問題               | 282 |
| 13 日本の村落の成立・発展の歴史        | 283 |
| 14 地形図からみた開発の歴史          | 286 |
| 15 日本の交通の特色              | 289 |
| 付録                       |     |
| 1 日本文学略年表                | 292 |
| 2 中日歴史対照年表               | 298 |

## 第一章 日本文学史

### 1 上代文学——概観・応用問題(祝詞・宣命・記紀・詩歌)

#### 1-1 上代文学概観

##### (1) 上代文学の背景

上代とは、文学の発生から平安京遷都(七九四)までをさす。<sup>やまと</sup>大和・<sup>あすか</sup>飛鳥・<sup>なら</sup>奈良時代とも呼ぶ。

大昔、人々は、狩猟・漁労・採集の生活を営みながら各地に散在していた。紀元前三世紀頃に集団による農耕生活が始まり、各地でだんだん小国家が作られていった。四世紀には、大和朝廷が統一国家成立を成し遂げ、<sup>たいか</sup>大化の改新(六四五)を経て、律令国家としての基盤固めを進めた。七世紀からは遣隋使や遣唐使が大陸に派遣されて、中国や朝鮮半島などの文化が取り入れられ、飛鳥文化・<sup>はくほう</sup>百鳳文化・<sup>てんびょう</sup>天平文化などが生まれていった。

##### (2) 口承文学の時代

自然の恵みのもとに農耕生活を営む人々は自然の驚異的な現象を神々のしわざと考えて畏怖し、万物には靈魂が宿ると考え、神を崇め祭った。これが「祭り」の始まりであり、人々は祭りを通して共同体の絆を強めていった。そして、祭りの場で神々や祖先に対して語られ歌われる神聖な言葉は、「いまだ文字あらず、貴賤老少、口々に相伝へ、前言往行存して忘れず」(<sup>こごしゅうい</sup>「古語拾遺」序文)とあるような時代にあつては、「口々に相伝へ」るしかなく、長い間子孫に言い継ぎ歌い継いで伝承されていった。このようにして誕生したものが神話・伝説・歌謡・<sup>のりと</sup>祝詞などの<sup>こうしゅう</sup>口承文学である。特に、神々の行動などを語る神話や、物事の起源や英雄の事跡などを語る伝説などは各氏族で<sup>かたりべ</sup>語部といわれる人々によって伝承されていた。

##### (3) 記載文学の時代

大和朝廷は国家を統一すると、朝鮮半島との交渉を始め、四世紀ごろに大陸から漢字が伝来した。漢字は次第に実用化され、六世紀頃には漢字で表記できるようになり、文学作品も漢字によって記述されるようになった。このように漢字で記された文学を記載文学という。

しかし、日本人が自分の考えを漢字・漢文で表現しようとしたとき、日本語の固有名詞などの表記には大きな困難を伴った。そのため、日本語の音のままに、漢字の音や訓を借りて表記する方法として「万葉仮名」が考案された。この表意文字である漢字を表音文字として使用するという万葉仮名の試みは、後に片仮名、平仮名という仮名文字の誕生につながっていく。

一方、皇室を中心とする国家体制が完成するにつれて、しだいに国家意識が高揚していった。特に、壬申の乱に勝利した天武天皇は、各氏族で伝承されていた神話や伝説をもとに天皇家の正統性を後世に伝えようとして、史書編纂の一大事業を国家的規模で進めた。こうした企ては奈良時代初期に『古事記』『日本書紀』という歴史書となって結実することになる。同じ時期に成立した地誌『風土記』も強い国家体制確立をめざした基盤整備の一環として編纂されたものである。また、宮廷中心の伝承である『古事記』や『日本書紀』に対して、諸氏族の伝承の筆録も盛んになった。例えば、奈良末期成立の『高橋氏文』、平安初期成立の『古語拾遺』がその代表的著作である。

ところで、大陸文化を積極的に受容する中で、漢詩文が盛んに作られるようになった。それらを集大成した漢詩集が『懷風藻』である。また、集団的な古代歌謡から生まれた和歌は個人の叙情を盛る容器としての性格を強めていき、個性的な歌人の独自の歌風が形成されていく。例えば、『古歌集』『柿本朝臣人麻呂歌集』『類聚歌林』『笠金村集』『高橋虫麻呂之歌集』などはこの時期の各歌人の文学的営為を示す遺産として重要である。こうして、八世紀中頃までに成立した、あらゆる階層に及ぶ数多くの和歌を編んだ一大歌集が『万葉集』である。

## 1-2 文学史・文芸用語解説

**言霊信仰**:言葉に霊力があるとする信仰。

**祝詞**:古代人の「言霊信仰」に根ざし、①神事に際して群臣によみきかせるもの、②祭りの儀式の時に神々に祈願するもの、③天皇に上奏して御代の長久を祝福するものがある。現存する祝詞は『延喜式』(九二七)の二十七編、『中臣寿詞』一編の計二十八編。

**宣命**:祝詞の系統。天皇が臣下に宣り聞かせる言葉。漢文体を詔勅といい、純粹の和文体が宣命である。「宣命書」で書かれる。現存する宣命は『続日本紀』の六十二編。

**古代歌謡**:記紀歌謡(古事記・日本書紀に収録されたもの)のほか、琴歌譜(和琴の譜本)、仏足石歌(奈良薬師寺の仏足石歌碑に刻まれる)などにもみられる。

かたりべ

語部:記録以前には、神話・伝説・説話はすべて口承によって伝えられた。口承によるそれらの伝承を職業にした集団が語部である。『古事記』『日本書紀』『風土記』などの問答は、口承された伝承が記録されたものであるから、当然語部がそういう仕事にかかわっていたものと思われるが、くわしいことはわからない。

万葉仮名:漢字の音訓を借りて「やまとことば」を表記したもの。

和歌の歌体と分類:片歌は旋頭歌一首の半分の意であろう。五七七の三句で一首独立する。旋頭歌は頭を旋らす意で、頭は上の句又は第一句の意。長歌には原則として反歌がつくが、反歌は形式は短歌と同じで長歌の要約や足りないところを補う意がある。片歌は五七七の形式である。旋頭歌は五七七・五七七の形式である。長歌は五七・五七…五七七の形式で、五七のまとまりを二回以上くり返し、五七七で終わり、五七調の韻律をなす。短歌は五七・五七七の形式である。仏足石歌は五七五七七・七の形式である。

枕詞:主として和歌にみられる修辞用語で、一定の語の上にかかって、ある種の情緒的色彩を添えたり、句調を整えたりするのに用いられるが、歌の意味とは直接関連はない。五音が普通。

序詞:枕詞と同じ働きだが、枕詞が歌の五音の一句を主とするのに対し、普通は五音以上できまってははいない。

そうもん ばん か ぞう か  
相聞・挽歌・雑歌

相聞は広くは人間同士の贈答の歌、特に恋愛の歌。挽歌は棺を挽く時の歌、死者を悼む歌。雑歌は、それ以外の式の歌や宴席の歌などさまざまなものがあるが、内容としては相聞や挽歌に属するものもあり、『万葉集』に全巻がこの基準で統一されているわけではない。

東歌・防人歌:東歌は万葉集巻十四に見える、東国の庶民生活から生まれた民謡的な歌であり、防人歌は万葉集巻二十に所収、東国から九州防備のため派遣された兵士やその家族の歌である。

六国史:『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』の六種の官撰の史書で、記述は漢文、史体は編年体。専門の史官によって作られたものではなく、書名は中国の先例に従ったものだが、上代の資料としては重要なもの。

まこと:人間の心を自然のままに写し出す素朴な美。賀茂真淵は、上代文学の精神を表す語ととらえる。

### 1-3 有名作品冒頭文

① <sup>あめつち</sup>天地初めてひらけし時、<sup>たかま</sup>高天の原に成れる神の名は、<sup>あめのみなかぬしのかみ</sup>天之御中主神、次に<sup>たかみ</sup>高御

産巢日神、次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして身を隠したまひき。(「古事記」)

- ② 古天地のいまだ割れず、陰陽分れざりし時、混沌れたること鶏の子の如くして、ほのかにして牙を含めり。(「日本書紀」)

\* 日本書紀の原文は、歌謡・古詞のほかは漢文体で書かれている。

## 1-4 応用問題

### (一) 上代文学概観問題

(1) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

大和時代の文学を口承時代と記録時代とに分けるとすれば、前者は英雄や氏族の社会を基盤として、集团的叙事文学が栄えた時代であり、後者は律令制社会を基盤として、①中国の文学や思想を摂取し、従来の叙事文学を個性的 [A] 文学へと発展させていった時代である。口承時代には神話・伝説・歌謡・祝詞が行われていたが、記録時代にはいると、神話・伝説は国家意識のもとに②史書・地誌として定着し、歌謡は次第に詠む歌として芸術化されて、この時代の代表的文学たる [B] となり、一方謡うままにうけつがれたものは、③平安時代にはいって特別な発達をとげ、宮廷においても行なわれた。

また、言霊信仰を基礎とし、呪禱の行為と密接に結びついた祝詞からは、祭祀に際して、唱えられる [C] と、政治において、みことのられる [D] とが発展して、特に前者の神事思想と音楽的詞章は、大和時代の長歌の名手たる [E] に大きな影響を与えている。

問一 上の文章中の空所に入る語を漢字で答えよ。

問二 下線部①の「中国」は、そのころ何という名称でよばれていたか。当時の日本と文化的に最も交渉の深かった国を一つあげよ。

問三 下線部②の部分に該当する書名を、「史書」と「地誌」とからそれぞれ一つずつあげよ。

問四 下線部③の部分に該当する歌謡を二種類あげよ。

#### 【解答】

問一 A = 叙情 B = 「万葉集」 C = 祝詞 D = 宣命 E = 柿本人麻呂

問二 唐

問三 史書 = 「日本書紀」(「古事記」も可) 地誌 = 「風土記」

問四 神楽歌・催馬楽 (補説) 上代の歌謡や祝詞の影響を受けて成立した平安初期の歌謡には次のものがある。神楽歌、催馬楽、風俗歌、東遊歌。

(2)後の問いに答えよ。

- ①神事の際に神に対して祈ることばを何というか。
- ②神意を受けて天皇が臣下に下す詔勅文を何というか。
- ③文字によらない上代の文学を何というか。
- ④ことばには霊力があるとする信仰は何信仰か。
- ⑤天武天皇の遺志を受けて、七一二年に成立した日本最古の文学的な史書は何か。

⑥稗田阿礼<sup>ひえだのあれ</sup>が誦み習った神話や伝説を記録した人物はだれか。次から選べ。

ア 天智天皇<sup>てんじ</sup> イ 推古天皇<sup>おののの</sup> ウ 中臣鎌足<sup>なかとみのかまたり</sup> エ 太安万侶<sup>おおのやすまろ</sup>

- ⑦舍人親王<sup>とねり</sup>が中心となって編纂した史書は何か。
- ⑧『古事記』『日本書紀』に記載されている歌謡を総称して何歌謡というか。
- ⑨七五一年に成立した日本最古の漢詩集を何というか。
- ⑩次のような部立ての歌をそれぞれ何というか。

ア 恋愛や恋のやりとりの歌                      イ 死者を悼む歌  
ウ 東国の民謡風の歌                              エ 九州に派遣された兵士やその家族の歌

⑪『万葉集』の歌を形式の点から見ると、どういう形式のものが多いか。多い順に二つ答えよ。

⑫『万葉集』の歌風の特色を表すことばを次から選び、記号で答えよ。

ア 直情的      イ 浪漫的      ウ 象徴的      エ 審美的  
オ 深遠      カ 優雅      キ 素朴      ク 滑稽

⑬次の中から日本最古の歌学論書を選び、記号で答えよ。

ア 古語拾遺      イ 高橋氏文      ウ 歌経標式      エ 日本霊異記

⑭『万葉集』の部立ての中で、古今集では「恋」の部立てになっているものは何か。

【解答】①祝詞 ②宣命 ③口承文学 ④言霊信仰 ⑤古事記 ⑥エ ⑦日本書紀  
⑧記紀歌謡 ⑨懐風藻 ⑩ア相聞 イ挽歌 ウ東歌 エ防人歌 ⑪短歌・長歌  
⑫ア・キ ⑬ウ ⑭相聞

(3)次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

大陸文化の強い影響のもとに日本でも古くから日本人の手によって、漢詩文が作られた。天智天皇の近江朝廷では、皇族や貴族の間で漢詩文が隆盛を極めた。天平勝宝三年(七五一)十一月に成立した A は、六十四人の詩百二十編を収め、現存する漢詩集の中で最も古い。詩形は五言を主とし、B の詩は七首にすぎない。前期の作品には中国の六朝<sup>りくちようし</sup>詩の影響が見られるが、後期の作品には初唐詩の影響も認められる。作者は当時の貴族階級がほとんどである。題材はa 侍宴、b 応詔、c 從駕、d 述懷<sup>おうみのみよね</sup>の詩が多く、恋愛の詩は見られない。撰者は淡海三船説があるが定説はない。この詩集

は『万葉集』編纂の機運を促進したばかりでなく、**C** 初期の漢文学隆盛の先駆をなしたものであるとして重要であり、また当時の貴族の漢詩文の教養を知るものとして注目される。

問一 A～Cの空欄に適切な言葉を記入せよ。

問二 a 侍宴～d 述懐のよみかたを記し、どういう折の詩か、簡単に説明せよ。

【解答】

問一 A 懷風藻 B 七言 C 平安

問二 a 侍宴 = じえん = 御宴に侍って作った詩。 b 応詔 = おうしょう = 天皇の言葉に答えて作った詩。

c 從駕 = じゅうが = 天皇の行幸に従った時の詩。 d 述懐 = じゅつくわい = 自分の心のうちを述べた詩。

## (二) 作家と作品別問題

(1) 次の文章を読んで、文中の空欄(A、B)に適する語を入れよ。

**A** は国家の建設をかたる叙事文学であって、**B** は個人が感情生活にめざめ、それを醇化した記録である。日本国民が超個人的なものを実現せんとする努力は、皇室中心の国家の建設となり、我の充実を求むる傾向はまず **B** の主情主義となつてあらわれる。この二つの精神はこの後乖離し、**B** の流れからは、平安朝の和歌、日記、物語などが生まれ、徳川の軟文学に移り、**A** の精神は平安朝には萎微し、その後、神皇正統記、大日本史、日本外史などとなったが、二つの精神が合流することは稀であった。

【解答】A = 古事記 B = 万葉集

〈補説〉Aは日本書紀も考えられるが、古事記に比べると文学性に乏しい。

(2) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

古事記の序文によると、**A** は諸氏族に伝わる天皇家の記録である帝紀と、皇族や氏族の伝承、民間説話などを書きとめた本辞とが次第に正確さを失い虚偽が生じていることを嘆き、これらを比較検討し、天皇中心国家の政治的規範になるようなものを作って、後代に伝えようとした。語部の**B** はその命令を受け、今まで伝承されている帝紀と本辞を誦み習ったが、撰録までいかないうちに天皇は崩御。**C** はその遺志を継ぎ、語部が誦み習ったものを、**D** に命じて撰録させ、和銅五年(七一二)正月に完成した。

## 第一章 日本文学史

本文の文体はすべて漢字を用いて和文を表記したもので、**E**体(主語 + 述語 + 目的語(補語))と**F**体(主語 + 目的語(補語) + 述語)が適宜使用されている。ただし、歌謡は一音節一字の**G**で表記されている。

日本書紀は古事記ができてから約八年後の養老四年(七二〇)に成立した。文学性に富んだ古事記に比べると、より歴史的な性格が強い史書である。古事記が国家統一の政治的意図で編集されたのに対して、これは、大陸との文化交流が盛んになったこともあって、対外的に日本の存在を明らかにする目的で編集された。編集の中心になったのは**H**である。

体裁は中国の史書にならって編年体を採用し、異説を並べたのも客観的であり論理的である。文体はすべて純粋な**E**で書かれているが、歌謡の表記は古事記と同じである。

古事記、日本書紀の史書編集と並行して、朝廷では和銅六年(七一三)諸国に命じて、その国の産物や山川原野の地名の起源、古老などが伝えた珍しい話などを報告させた。これが**I**である。現存する完本は**J**だけで、略本では播磨<sup>はりま</sup>、常陸<sup>ひたち</sup>、肥前<sup>ひぜん</sup>、豊後<sup>ぶんご</sup>の四か国のものが伝えられている。収録されている説話の中には、浦島物語、三輪山伝説、羽衣伝説、国引き説話などがある。あまり政治的意図にとらわれていないので、当時の地方民衆の生活や信仰がわかり、**K**研究の貴重な資料である。

問一 A・B・C・D・Hには、次のア～クの人名がはいる。適切なものを選び。

ア 舎人親王    イ 稗田阿礼    ウ 天武天皇    エ 元明天皇  
オ 太安万侶    カ 大国主命    キ 須佐之男命    ク 仁徳天皇

問二 E・F・G・I・J・Kに適切な語句を記入せよ。

問三 編年体とはどういう史書の編集スタイルのことか、簡単に説明せよ。又「編年体」の対照語を何というか。それはどういう編集スタイルのことか、簡単に書け。

問四 古事記や日本書紀が編述された時期を次のア～オから選べ。

ア 六世紀    イ 七世紀    ウ 八世紀    エ 九世紀    オ 十世紀

問五 次のア～コの各項目は古事記、日本書紀のいずれの特徴を表していると思われるか。古事記の場合は古、日本書紀の場合は日と記入せよ。

ア 対外的に日本の存在を明らかにする意図を持っている。

イ 国内統一の政治的意図によって編集されている。

ウ 和習漢文とも言える。漢字の音と訓を巧みに用いて古語を生かそうとしている。

エ 純粋な漢文体で、中国の史書の言葉を引用して文章を修飾している。

オ 叙述が客観的、論理的である。

カ 叙述が主観的、具象的である。

キ 文学性に富み、資料を取捨選択し、一貫した筋で物語を展開している。

ク 史書をもとにした編年体で歴史的 성격が強い。異説を並べ古伝承を多く記録している。

ケ 資料として当時の記録や文書、書物などを用いている。

コ 資料として帝紀と本辞を用いている。

【解答】

問一 A=ウ B=イ C=エ D=オ H=ア

問二 E=漢文 F=国文 G=万葉仮名 I=風土記 J=出雲国風土記 K=民俗

問三 年代を追って事実を記述する歴史の書き方。編年体の対照語は紀伝体で、個人を中心とした歴史記述のスタイル。

問四 ウ

問五 古:イ・ウ・カ・キ・コ 日:ア・エ・オ・ク・ケ

(3) 次の文章を読んで、空欄にあてはまる適語を、後の語群からそれぞれ選べ。

『古事記』『日本書紀』の歌謡はもともと民謡風のもので、作者の名もたしかではないが、『万葉集』になると個人としての作家の存在が明瞭になってくる。人麻呂は  で、強い感動を豊かな修辞によって芸術化し、赤人は  で清らかな情調を単純な語句の中に形象化した。  のように、人生の望みや悲しみを、平明なことばで率直に歌ったもの、  や  のように大陸文芸から受けた感化を含みながら、それを日本的な様式で美化しようとする、教養の深さを示したものもあった。又  のような高貴な女性で、人麻呂を思わせる情熱の美を作歌によって不朽にした人もある。しかし辺土の守りにつく  の真情を吐露した歌や、東国の農民の素朴な心をうたった  などには民謡の風も残っている。

〔語群〕ア 業平 イ 旅人 ウ 小町 エ 額田王 オ 家持  
カ 憶良 キ 躬恒 ク 長歌 ケ 東歌 コ 防人  
サ 今様 シ 小歌 ス 抒情的 セ 叙景的

【解答】Aス Bセ Cカ Dイ Eオ Fエ Gコ Hケ

(4) 次の文章を読んで、後の各問いに答えよ。

万葉集は作者の階層が広範囲に及び、制作年代も長期にわたるが、歌人の活動時期や歌風の変遷によって次の四期に分けることができる。

第一期 舒明天皇の時代から壬申の乱までの約四十年間。口承的な古代歌謡の面影を残しながら個性的な和歌が生まれてくる時期で、平明素朴な歌が多い。この期は皇

## 第一章 日本文学史

室歌人が多く活躍し、代表的な歌人には舒明天皇、 A  B らがある。

第二期 天武・持統・文武<sup>もんむ</sup>の三代にわたる藤原時代から平城京遷都までの約四十年間。律令国家の整備が進み、皇室の繁栄がもたらされた時期で、歌の思想内容や表現技術が複雑になり、 C が大いに発達した。代表的歌人には D <sup>たけちのくろひと</sup>、高市黒人、持統天皇、志貴皇子<sup>しきのみこ</sup>、大津皇子らがある。 D は万葉中最高の歌人と見られ、長歌、短歌にわたって優れた作品を残した。特に長歌では古代歌謡にみられた①枕詞、②序詞、対句、反復、漸層法などの技法を縦横に駆使し、豊かな構成力で、荘重、雄大な調べを持つ宮廷賛歌や、沈痛にして悲哀に満ちた挽歌を作った。 E は叙景歌に優れ、鮮明で透徹した自然観照の歌風をひらいた。

第三期 和銅三年(七二〇)の平城京遷都から聖武天皇の天平五年(七三三)ごろまでの約二十年間。古事記、日本書紀が完成し、風土記が計画された時代で、万葉集の最盛期にあたる。この時期には個の意識に目覚めた人が多く出て、個性豊かな作品を生み出した。代表的歌人には F  G  H、大伴旅人、笠金村がある。 F は清澄な自然観照による優れた叙景歌を作り、 G は儒教的倫理に基づく批評精神によって社会の矛盾や人生の悲哀を歌い、 H は地方に伝わる伝説を素材とした叙事的長歌に優れ、旅人は名門に生まれた当代一流の知識人として大陸文化の教養に基づく特異な世界を築いた。

第四期 聖武天皇の天平六年ごろから<sup>じゅんにん</sup>淳仁天皇の天平宝字三年(七五九)までの二十数年間。天平文化は爛熟期を迎え、東大寺の造営や大仏開眼があり、華やかな時代であったが、裏面では貴族間の政争や反乱などで社会不安が深刻化した。万葉集時代は終わりを告げ、歌は力強さを失って理知的、 I 的となり、繊細優美な情趣を尊ぶようになった。この期の代表的歌人に J がいる。

又、万葉集には古代の民衆の歌が多く残されている。巻十四に見える③東歌は、東国の庶民生活から生まれた K 的な歌であり、巻二十の④防人歌は東国から九州防備のため派遣された兵士の歌で、ともに素朴な心情を率直に歌っている。

問一 上の文章中のA～Kで、C・I・Kには適切な言葉を、それ以外は人名を正確に漢字で記入せよ。

問二 ①枕詞、②序詞について簡単に説明せよ。

問三 次のア～キは『万葉集』の中で、わりあい知られた歌であるが、作者を問題文中の空欄の記号で書け。

ア 世の中を厭<sup>う</sup>しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

- イ 田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の<sup>たかね</sup>高嶺に雪は降りける  
 ウ 家<sup>け</sup>にあれば<sup>いひ</sup>筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る  
 エ <sup>にきたつ</sup>熟田津に舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな  
 オ 東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ  
 カ 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも  
 キ 勝鹿の真間の井見れば立ち<sup>なら</sup>平し水汲ましけむ<sup>てこな</sup>手児奈し思ほゆ

問四 ③東歌、④防人歌のよみを書け。

問五 次の著作は『万葉集』の影響を強く受けたと言われる人の書いたものである。  
 著者の名前と、生きた時代を、中古、中世、近世、近代のいずれかの呼び方で記せ。

ア 万葉代匠記 イ 赤光 ウ 歌よみに与ふる書 エ 金槐和歌集

【解答】

問一 A = 有間皇子 B = 額田王 C = 長歌 D = 柿本人麻呂 E = 高市黒人  
 F = 山部赤人 G = 山上憶良 H = 高橋虫麻呂 I = 感傷 J = 大伴家持 K =  
 民謡

問二 ①枕詞:主として和歌にみられる修辞用語で、一定の語の上にかかって、ある  
 種の情緒的色彩を添えたり、句調を整えたりするのに用いられるが、歌の意  
 味とは直接関連はない。五音が普通。②序詞:枕詞と同じ働きだが、枕詞が  
 歌の五音の一句を主とするのに対し、普通は五音以上できまってははいない。

問三 ア = G イ = F ウ = A(有間皇子) エ = B(額田王) オ = D カ = J  
 キ = H

問四 ③東歌:あづまうた ④防人歌:さきもりうた

問五 ア = 契沖・近世 イ = 齊藤茂吉・近代 ウ = 正岡子規・近代 エ = 源実  
 朝・中世

(三)原文解説

(1)次の文はある書物の序文の一節である。①この書物の名前は何か。②この書物の  
 編者は誰か。それぞれ漢字で答えよ。

ここに天<sup>すめらみこと</sup>皇<sup>の</sup>の詔りたまひしく、「朕<sup>ちん</sup>が聞けらく、「諸家のもてる帝紀および本辞、  
 すでに正実に違ひ多く虚偽を加ふ」ときけり。今の時に当りてその<sup>あやまり</sup>失を改めずは、  
 いまだ<sup>いくとせ</sup>幾年をも経ずして、その<sup>むね</sup>旨滅びなむとす。これすなはち邦家の経緯、王化の<sup>こう</sup>鴻  
 基ぞ。かれこれ、帝紀を<sup>せんろうく</sup>撰録し、旧辞を<sup>とうかく</sup>討覈して、<sup>いつはり</sup>偽を削り<sup>まこと</sup>実を定めて、後の<sup>のち</sup>葉に  
<sup>つた</sup>流へむと<sup>おも</sup>欲ふ」とのりたまひき。時に<sup>とねり</sup>舎人あり。姓は<sup>ひえだ</sup>稗田、名は<sup>あれ</sup>阿礼、年はこれ廿八。

人となり聡明にして、目に<sup>わた</sup>度れば口に<sup>よ</sup>誦み、耳に<sup>み</sup>払るれば心に<sup>しる</sup>勒す。すなはち、阿礼に<sup>みこと</sup>勅語して、帝皇の<sup>ひつぎ</sup>日繼および先代の旧辞を誦み習はしめたまひき。

【解答】①古事記 ②太安万侶

(2) 次の富士山の歌を読み、後の問いに答えよ。

天地の分れし時ゆ ①神さびて高く貴き <sup>するが</sup>駿河なる富士の高嶺を ②天の原振り放  
け見れば 渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず ③白雲もい行きはばかり時じ  
くぞ雪は降りける 語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

④田児の浦ゆうち出でて見れば 真白にぞ

富士の高嶺に雪は降りける

(万葉集)

問一 下線の部分の意味として最適なものを選び、記号で答えよ。

- ① ア 神として高く貴い                      イ 神様めいて高貴な  
    ウ 神々しくて高く貴い                  エ 神様ぶって高貴な
- ② ア 大空遠くふり仰ぐと                    イ 天空にふり仰いで遠く見やると  
    ウ 大空に目をやって仰ぐと              エ 大空高くふり仰いで見ると
- ③ ア 白雲も山をはばかって行きかねイ 白雲も山をじゃまにして  
    ウ 白雲も山にさまたげられて          エ 白雲も行きなやんで
- ④ ア 田児の浦から広い海を見ると  
    イ 田児の浦を出て外の海から見ると  
    ウ 田児の浦を通して広いながめのきく所へ出て見ると

問二 この作品の作者はだれか、記号で答えよ。

ア 大伴家持      イ 山上憶良      ウ 山部赤人      エ 柿本人麻呂

問三 この作品のような文学を何というか。記号で答えよ。

ア 短歌              イ 長歌              ウ 旋頭歌              エ 仏足跡体歌

〔ヒント〕「神さびて」の「さび」は、「そのものにふさわしい、そのものらしい」行為・様子をし、そういう状態であることを示す接尾語。

【解答】問一 ①ウ ②イ ③ア ④ウ 問二 ウ 問三 イ

## 2 中古文学——概観・応用問題(和歌・物語・日記・随筆・説話)

### 2-1 中古文学概観

#### (1) 中古文学の背景

中古とは、平安京遷都(七九四)から鎌倉幕府の成立(一一九二)までの約四百年間を